21世紀に期待する

真の技術大国世界一を目指して — 火星日本人一番乗りの夢 —

河島 信樹

近畿大学 理工学部数学物理学科 (〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1)

Aiming the True World Leading Country in Engineering Technology - Towards the First Japanese on Mars -

Nobuki KAWASHIMA

Dep. of Science and Engineering, Kinki University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka 577-8502

前世紀の終わりの四半世紀、我が国は戦後の最高の時代を謳歌してきた。戦後の苦しい時代からここまで発展してきたのは、日本人の優秀さと勤勉さの賜物である。科学技術を基盤として強い経済力をもつ国に発展してきた。しかし、資源のない国として、本当に21世紀もこの繁栄を維持できるのであろうか。

非常に気懸かりなのは、経済的に世界一をいろいろの分野で達成した我が国として、これからの国の進み方に対してある意味で国民が無力感に包まれていることである。戦後の苦しい時期には人々は、毎日の飢えを満たすことに汲々としてきた。しかし、その時代は、何とか豊かになろうとする国民共通の目標があった。しかし今や21世紀を迎えて、我が国では国民共通の目標がなくなっている。細かいところでは不満はあっても、多くの人々が現状維持志向である。若者も親のそのような考えに多くは素直について塾通い、予備校に頼る生き方をしている。

しかし、このところ長期化する日本経済の停滞をみていると、日本の将来が決してバラ色でないことは明らかである。特に最近の落ち込みはひどい。バブルの後遺症に苦しんでいるのは勿論であるがそれだけではない。土地などの不動産は明らかにバブル以前に戻っている。もっと根本的なものが現在の不景気をもたらしめている。頂点を極めたものが直面する根本的な問題を多く抱えている。これは、単に一時的なものではない。これから始まる21世紀に対する大きな警鐘と受け止めなければならない。

21世紀に向けて我が国の進むべき道は、真の世界一を達成し、世界をリードする国になることである。確かに我が国は、経済的にはある面では世界一ともいえる。例えばODAや国連分担金などで世界一である。国民所得も人口1000万人以上の国では、世界一である。しかし、外国では一般の人はこのような事実を殆ど知らないし、我が国を世

界一であり、世界をリードしていると認める人はいない。

資源のない我が国が、これまでの先輩の努力にオンブしてそれを守ろうとしたのでは、国は破滅する。つねにさらに上を目指してこそ、将来がある。その上を目指した目標こそ、真の世界をリードする国になることである。いつまでも、米国にその役割をまかしておくべきではない。

資源のない我が国が真の世界をリードする国になる鍵は、独自の強い科学技術力である。日本のこれまでの発展も科学技術が支えてはきた。しかし、それは、我が国独自のものではない。欧米で発明されたものを改良し、低廉化して市場を支配してきた。カメラにはじまり、トランジスタラジオ、車、ウォークマン、CDプレーヤなど世界を支配している技術のほとんどは日本独自のものではない。ITについては、アメリカに大きな水を空けられた。これから21世紀に向けて必要とされるのは真に日本独自の科学技術を生み出して世界をリードすることである。そして独自の科学技術を発展させるには、なにか大きなシンボルが必要である。レーザーを用いた技術やその発展に期待するのは、現状では難しいが、私はそのシンボルとして、日本人を火星に世界に先駆けて一番乗りさせるという目標を主張している。

21世紀はじめの国家的な大きな目標として、日本人火星有人探検一番乗りをかけたて、独自の科学技術の発展を引っ張っていくのである。宇宙開発では、H-2ロケット、M-Vロケットの失敗で我が国はいま厳しい環境にある。レーザー推進、長距離レーザーエネルギー伝送、アーム長500万kmのレーザー干渉計重力波アンテナなど、レーザー応用の分野でもいくつかの魅力的な話題があるなかで、水を差すものになっている。これもわが国の宇宙開発が米国追従で、独自の発展を怠った代償である。

世界一とか、世界をリードする国という表現をすると、こ

れまでは、かなり強い抵抗があった。第二次大戦に敗れて、戦時中の軍主導の全体主義の反動として、日本人は日本人としての誇りを失ってしまい、日本人としての国民意識をもつことが「悪」であるという風潮が特に文化人の間に強かった。しかし、世界の他の国は違う。どこの国へ行っても自分の国には強い誇りをもっている。日本人だけである、自分の国としての意識を失ったのは、戦後半世紀を過ぎ、新しい世紀に入った。いつまでも過去にとらわれてはいけない。過去の過ちを率直に認め、それを将来に生かしてはじめて国の将来がある。世代も代わった。今の若い人たちには、戦後のいわゆる文化人のなかにあったこの種の議論に対するアレルギーはない。むしろ、外国へいくことが当たり前になって世界を知り、自分の国に誇りをもつ

河島 信樹

Nobuki KAWASHIMA

1937年2月5日生。1959年東京大学理学部物理学科卒。1964年同大学院数物系研究科物理学専攻修了、理学博士。日本原子力研究所研究員、NASA客員研究員、東京大学宇宙航空研究所(のち文部省宇宙科学研究所)助教授、

ことの重要性を肌で感じるようになってきている。戦前の全体主義の一番の問題点は、他の国を侵略し、領土を広げ、政治的経済的に支配しようとしたところにある。火星に日本人を一番乗りさせるのには、他の国に迷惑をかけない。やろうと思えば、日本だけで閉じてできるところがよい。

火星日本人一番乗りの一番大きな役割は、21世紀に向けて大きな夢をもつ若者を育てるのである。いい大学に入って大手の会社に就職することを人生の最終目的であるなどと考える若者は、国を破滅させる。自分が世界で初めて火星にいつてみせる位に元気な若者がたくさんでてくることが、21世紀の日本の発展を支える。

教授を経て1997年より近畿大学理工学部教授、学部長補佐。スペースシャトルなどを用いた宇宙開発研究、月・惑星探査の基礎開発、レーザー干渉計重力波アンテナ開発、レーザー応用研究など。日本物理学会、プラズマ・核融合学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、高温学会、惑星科学会、日本航空宇宙学会会員。

連絡先 E-mail: knobuki@phys.kindai.ac.jp